水上勉全集 13

水上勉全集

13

水上勉全集　第十三巻

昭和五十二年五月一日印刷
昭和五十二年五月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七七

目次

蓑笠の人　3
流れ公方記　93
越前一乗谷　219
天正の橋　379
緋の雪　397
鴉　427
あとがき　473

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

蓑笠の人

一

「自従出家後　蹤跡寄雲烟　或与漁樵混　又共児童歓　王侯曷足栄　神仙亦非願　所遇便即休
何必嵩丘山　乗彼日新化　優游可窮年」

出家してより　身は雲まかせ　樵夫（きこり）とまじわり　児童（わらべ）とたのしむ　王侯そもなにかせん　神仙ねがわしからず　棲家いずこなりとも　奥山をよしともおもわず　日に日にこころあらたに　生命（いのち）のどかにおわらなむ

良寛の詩の一篇を、東郷豊治氏『新修良寛』の名訳から抜書させてもらった。いつよんでも、良寛さまは雲上の境涯だな、と思う。私などには到り得ない境地だなと思う。と同時に、良寛さまの時代はずいぶん暢（のんき）気な世の中だったのだなとも、越後は平和だったのかなとも思う。こんな詩もあるからだ。

「蕭条三間屋　摧残朽老身　況方玄冬節　辛苦具難陳　啜粥消寒夜　数日遅陽春　不乞斗升米
何以凌此辰　静思無活計　書詩寄故人」

さびしさは　あばら屋に身を　老いさらぼえての　侘び住まい　真冬となれば　猶のこと

つらしとも　くるしとも　粥をすすって　寒夜をしのぎ　指折りかぞえて　春待つばかり
米はいよいよ　嚢底に尽き　ほかに芋なし　野菜なし　考えあぐむも　知恵もなし　君あわれめよ　この詩見て

冬の五合庵の寂寥はよくわかるのである。耕さない人に蓄米のないのは道理で、「老いさらぼえて」とあれば、同情もうかぶが、「年譜」をみると、国上山住まいは四十八歳頃のことだから、まだ鍬のもてぬ年ごろではあるまい、かりに五合庵を出た年まわりとしても六十歳である。いまの人なら「老いさらぼえて」などとは己れにだっていえまい。気にかかることは、家の米袋には一粒もなくなり、野菜袋には芋なし、野菜なし、「考えあぐむも　知恵もなし　君あわれめよ　この詩見て」あわれめよ、とは誰にいったものだろう。なまけものの身勝手なげきはないだろうか。こんな感慨をおぼえてから久しいが、じつはいまもこの気持にかわりないのである。越後は平和だったか、と書いておいたが、じつは平和ではなかった。宝暦、明和、安永、天明の時代は何年も飢饉はつづいたし、農民騒動は諸所に起きていた。あとでゆっくり資料を提供してみたいが、凶作のつづいた天明の初め頃の百姓は、米はおろか芋も喰えなかった記録がある。その天明時代も、じつは良寛の二十歳から三十歳までの年まわりである。

幽谷の道場で只管打坐の日をおくる孤高の禅僧とて、霞を喰って生きたわけでもない。動乱の時節は動乱の米を、太平の時節は太平の米を喰っていたはずで、時代を超越してひたすら見性につとめたといわれても、百姓の収穫した米を耕さないで喰ったことはまちがいない。だが、禅僧

には托鉢、乞食という生活方法があって、それも信者からあたえられるのを前提にしての方針だろうが、飢餓凶荒時は、何ほどかの百姓の地獄を這いまわる眼が布施をうける側の眼にもはね返っていなければ人とはいえなかろう。高僧もまた人間である。人間であるからには世を捨てたなどといっても、捨てる世がそこにとりまいているわけで、めくらつんぼでないかぎり、暴動も、飢饉も、天災も、ゆめうつつの身でくぐったはずもないと思う。くぐるといったって、観念的にくぐったのではなくて、どういう米を、どういう顔で頂戴して、その恩をどういうように返したか、つまりその日常が、どう社会とかかわったかの問題が、いま私に気がかりなのである。得てして世にある高僧伝は、その人の境涯を、人品を高くうたいあげる。たとえば、良寛さまのことを、日々村を歩いて托鉢し、米があまれば雀にくれてやったと、伝記者はいうのである。雀にさえくれてやったのだから、人間にもあたえたとみてよいが、五合庵にそれほど米がありあまった日があったのだろうか。せまい部屋で火の気もなく、しもやけ足を撫でながら、凍える寒夜を、一人寝ですごしたとすれば、六十の年では、凍死と餓死一歩手前のはなしだ。だが七十四歳までの長寿は奇蹟といわねばならない。常識的に惟えば、ここは誰かが世話焼いてあれこれと良寛さまを助けたとみてさしつかえない。ところが、当人は、そのような世話になった人のことについて、あまりくわしくは書きのこしていない。

日本の高僧だけではない。中国の達磨大師なども嵩山少林寺で面壁九年とつたえられるが、いったい誰が飯を炊いたのか。九年のすわりづめも多少誇張があるし、二祖慧可が相見をたのんでも許されなかったから、左の肘まで切りおとして達磨に見せた。さすがの達磨もびっくりして入

堂をゆるしたといわれる。が、腕一本切り落せばあとの始末はどうしたか。手当を急がねば出血多量で死はまぬかれまい。名画とつたえられる雪舟の「慧可断臂図」をみていても、ちぎりとった腕を師にさしだしているものの、血がしたたり落ちていない。不思議に思ったものだ。ひょっとしたらこんなことはでたらめにちがいないのだ。得てして高僧伝は、現実味に欠けている。六祖慧能は飯炊き坊主で無学文盲だったといわれるが、神秀上座を打ちまかすあの詩偈がどうして壁面にかけたのだろう。『壇経』では代書人が書いたことになっているが、字を知らない男がどうして「本来無一物」といえたのか。ならべてゆけばきりがない。不思議だらけな話ばかりだが、ついでにいっておくと、私など小僧だった頃に、この国は中国に侵略戦を開始しており、老師、管長といわれた京都五山の老僧たちは、前線を訪ねて、中には長剣を吊って将官待遇となり、人殺しする兵隊を激励、皇威宣揚を説いた。そうして帰国すれば禅堂にすわって、雲水たちに絶対自由の自己見性を説いたのである。

これらの師家たちの「伝」を語る時に、その境涯の高さはうたわれるが、あのいまわしい戦争とどうかかわりあったかについてふれた人は少ない。当人のざんげ話もきいたことがない。高僧たちは、いったいどんな米を喰って生きたのだろう。中国禅の百丈懐海禅師は、「一日作さざれば一日喰らわず」と教えた。その法系が日本禅の源流であってみれば、いつから、作さずして喰う僧が高僧になったのか、そこらあたりの事情にさかしらな疑問をもってから久しいのであった。良寛さまが飢饉の年もぶらぶらして暮し、時には農家で酒をよばれればほろ酔いになって畦をまくらにうたた寝し、朝から子供とあそんで、手まりつき、かくれんぼして過しているうちに、日

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

が暮れたとするなら、百丈禅師に大喝を喰うことはうけあいである。こんな考えも俗物のせいか。

以上のようなことを考えながら、越後の江戸期における農民事情をさぐっているうち、『越佐草民宝鑑』なる一冊の郷土人物誌が手に入った。明治十七年に田川完助なる人が、天保時代の写本を水戸彰考館で見つけて複写したと誌されているが、原著者はわからない。ある人物について最初に概略を述べ、のちに各項にわたってかなりくわしく物語風に述べてある。その中に、良寛と同じ年、すなわち宝暦八年に生れた一人の水呑百姓が、良寛生地の出雲崎と程遠からぬ柿崎の地の米騒動に連座して佐渡遠島となり、文化二年に四十八歳で帰国し、数年後、蓑笠を着たまま生地の墓地に佇み、立亡（りつもう）している。立亡とは立ったまま死亡するという稀有のことである。こんな記録を読まされると、同じ年生れといいながらも、人はその生誕の家柄においてかくも違うものか、とふかい感慨にうたれた。じつはこの物語を書きすすめる気持にもなったのである。考えてみると、良寛もまた蓑笠の人といえる。脱俗、名利一切を拒否し、国上の五合庵にくらしたその日常は、風浪（ふうさん）水宿の禅生活実践にちがいなかったろう。一蓑一笠だったと思う。『宝鑑』に誌される水呑弥三郎もじつは「生涯蓑笠の人」とあり、次のようにその生涯の概略が述べられている。

「水呑弥三郎は、生涯蓑笠の人なりき。宝暦八年柿崎村字角取に生れ、父は水呑百姓虎市、母はきい、弥三郎は長男にして弟妹二人あり。弥三郎四歳のとき、従兄の死にあひ、人は死していかなる所にゆくやと問うて家人を困らしむといへり。幼時にして無常心あり、長じて才智すぐれしため、虎市は村肝入りの許しを得て上町善導寺内普門院浄海上人に漢学を学び、才は村童をしのいで村人を驚かしぬ。十二歳の時父虎市早逝せるにより、さらに無常心ふかまり、普門院に出家

を願ひ出づれども、法度ゆゑ不許なり。十三歳にして、新潟港湾人夫となり、慈母弟妹に孝養をつくさんとせしも、湧井が騒動の余波にて帰農のやむなきに至り、同村において農事のかたはら漁業人夫にいそしむ。しかるに不幸にも天明三年の騒動に連座せり。哀れなりき。すなはち、同三年より九年にわたりて大飢饉に遭遇せるにより、農民の困窮きはまりなし。加ふるに米価上騰し、白米一升じつに二百文。平年の六、七倍となりて、外米移入の方途なく、村人らは甘藷栽培の道も知らざりしため、細民の困窮絶頂に達せり。餓死者は巷にあふれたり。柿崎は天領なりしため、幕府の直轄にして出雲崎代官所の施政なりしが、漁師重左衛門、善三郎、水呑・藤左衛門、弥三郎その他数名はこれを座視するにしのびず、かつ米価高騰は一にかかつて大地主と酒造業者の米穀を買占め貯蔵せるが因なりと曲解なし、村民を語らひて三年十一月二日、螺(ほら)を鳴らし鯨(とき)の声をあげ、棒、竹槍、鳶口、其他凶器をたづさへ、中には鎮守神明宮の境内にありし二十三段の石塔を破壊用に用ゐんと背負ひ、道中庄屋七右衛門をはじめ、村人役人に会ひたるも、妨げるなとののしり、うちこはしに出れば、下条、角取、高寺、其他村民ら多数加はりたるに勢ひを得、一揆総勢四百余人に達し、一行は素封家木村家を襲ひ、母屋、土蔵の別なく狼藉破壊、障子・書物を焼き、帰路酒屋を襲ひ、放火暴動のかぎりをつくし、角取村にひきあげたり。出雲崎代官所は、与力以下同心をさしむけ、人心の安定につとめ、暴徒の主導者を逮捕、幕府の指示を仰ぎて、巨魁重左衛門は出雲崎において磔刑にし、善三郎、弥三郎を佐渡に、ほか四名を八丈に遠島せり。弥三郎は、金山水替人足を二十年間つとめ、勤務優秀なりしため、文化二年其罪を解かれて帰郷せしも、既に生家なく、妻子も不明なりき。よろけのため片盲ひとなりたるも、弥三郎は諸村を

放浪、あるいは乞食、あるいは作男などをつとめ、数年ののちにすでに慈母弟妹の眠る家郷に立ちて、立亡せり。哀れなり」

『宝鑑』はかように、弥三郎の生涯を簡記する。良寛の伝記は、「山本家家譜」によると次のようになる。

「以南の長男なり、宝暦七丁丑年に生る、幼字を栄蔵と称す。一び荘官の職を襲ひしが、安永参甲午年十八歳にして遁世し、尼瀬町光照寺第拾弐世玄乗破了和尚の徒弟となり、薙髪して良寛と称す。詩歌・書道を能するは世人の知る所なり、天保二辛卯年正月六日老病に罹り、島崎村能登屋元右衛門宅にて寂す。同所隆泉寺に葬る、寿七十五。自謚大愚良寛高首座と云ふ」

二

良寛は、あまり自分のことについてしゃべらなかったといわれている。和歌や漢詩は、多数発表したが、いわゆる私小説的に自分のことを告白したり、述志したり、その生いたちや修行時代のことについて、書いたり語ったりしなかった、とつたえられる。このあたりも不思議なことであるが、もし、それが真だとすると、世に数多くある「良寛伝」といわれるものは、本当にくわしいものはないことになる。私の知るかぎりでは、東郷豊治氏の『新修良寛』『良寛全集』、西郡久吾氏の『北越偉人沙門良寛全伝』がもっともくわしい。とりわけて、東郷氏の着実な良寛行実追跡は、わからないところの良寛をもよく語りつくしてみごとな「伝」となっている。それによると、「家譜」にある良寛の生年宝暦七年はあやまりであって、八年が正しいとなっている。「家

譜」の誤りさえ指摘されているのだから、東郷氏の慎重さもこれで想像できるのであるが、八年にうまれた良寛は、十八歳で遁世し、尼瀬の光照寺の玄乗破了和尚の徒弟に入りこみ、とつぜん薙髪得度する。栄蔵の名を捨てて良寛となった。のち玉島の円通寺へ修行にゆき、三十五歳前後に越後へ帰ると、国上山や近在に住んで生家へは帰らず、天保二年正月七十四歳で死ぬまで放浪、孤独三昧の生活だった、とされている。それでは良寛の家はどういう家柄だったのだろう。いま西郡久吾氏の『良寛全伝』から「山本家家譜」を抜粋してみたい。

「橘左門泰雄。神職を継ぎて後伊織と称す。父に継ぎて荘官となり、老いて薙髪し以南と号す。俳諧に名あり、又歌に通ず。与板町新木氏二男也、寛政七年卯七月二十五日、天真仏の告に依りて山城国桂川に身を捨つと、端書の短冊に辞世一首のみ残し在りたれども所在を知らず、又死状の実際及享年を詳にせず、仍て辞世の日を忌日に充つ。配山本氏佐州相川山本庄兵衛の女にして当家の姪なり、天明三卯年四月廿九日歿、享年四十九。以南神諡を寥廓雄命、仏諡を橘林院真心寥廓居士といひ、配秀子神諡を秀比米命、仏諡を樹林院法音蓮秀大姉と称す。

橘新左衛門尉泰儀。通称は左衛門、以南の第二男、良寛の弟子なり。後巣守と改め、又雲浦と号す、薙髪して無花果園由之と称す。国学・和歌・書画を善くす、寿七十三、天保五年正月十三日歿、墓は島崎村隆泉寺にあり。配渡辺氏安子、文化七年歿、寿四十二。

権大僧都快慶法印。以南の第三男にして、名は円澄、字は観山、泊瀬の碩学にして、円明院第拾壱世を襲ふ。寛政十二庚申年正月五日寂、神諡は快慶雄命（ヤスヨシヲミコト）と称す。

橘中務香。以南の第四男にして、澹斎と号す、文章博士高辻家の儒官たり。寛政三辛亥年八月

廿七日歿、寿不詳、神諡陶栄雄命、仏諡秀橘陶栄居士といふ。

たか子。以南の長女にして、出雲崎町高島氏に嫁す。

むら子。以南の第二女にして、寺泊町外山氏に嫁す。

みか子。以南の第三女にして、出雲崎羽黒町浄玄寺大久保智現に嫁す。老後薙髪して妙現尼と称す」

以上が父母弟妹の消息である。良寛の父は、早くから出雲崎の家を捨てて天真仏のお告げで桂川に身を投じた。その辞世の日を忌日にあてたとあるのだが、天真仏というのも何のことか不明だし、その辞世というのは、

「蘇迷盧（そめいろ）の山をかたみにたてぬればわがなきあとはいづらむかしぞ」

というのである。だが、この入水説も否定する学者はあって、父以南は、桂川などへ身を捨てていない。そういう噂をたてておいて、じつは高野山へ入って隠遁生活を送ってのち歿した。良寛は諸国放浪中だったが、どこかで父の異変を知り、京都にきて、弟澹斎と会い、その父を高野山に訪れて再会しているという書物もある。真偽のほどはわからないが、いずれにしても父親は、越後をとつぜん家出して、京都へゆき、消息をたったとみてよい。良寛はその長男なのである。

良寛の生家は出雲崎にあって橘屋といった。代々名主であった。良寛が生れた宝暦八年は父以南が二十三歳、母秀子が二十四歳。以南は名主と石井神社の神官をかねていた。「家譜」に諡号を「命（みこと）」としてあるのはその消息である。

橘屋は良寛の生れた頃は落ち目だったという。出雲崎は、同じ天領佐渡国と結ぶ要港で、名主

はその港にあって、村民、漁民を差配する立場である。重職といわねばならなかった。長男栄蔵は、やがてその家督をついで名主見習になった。ここで、名主または庄屋がどういうことを役目としたか、当時の「庄屋心得条目」なるものがあるので紹介したい。

一、庄屋役之儀者、一村之長として百性共江伝達之事件を初め、平生諸世話駈引等其役務たり、時により村中之惣代に可二相立一事付、謹而御仁政之御趣意を奉じ可レ遂二精勤一事。役威に傲り尊大驕奢之所業堅誡レ之、村内百性共より申出る儀を是非をもわかたず差押へ、誠実を上達せず、或は公事訴訟等に付賄賂を受、依怙之取計等いたしまじく、方正廉直を旨とし、条理明かに可二取計一事。

一、追々布令達する趣屹度相守、旨趣審に村内江可二申聞一事。

一、百性離散せざる様相心掛、貧窮之者あらば難渋いまだ行詰ざる内、救助の手立をなすべし、自然下において心に不レ任程之事を速に可二申立一、常々華美の奢を警め無益の費を省き、農業を勤め諸人成立之心遣ひ可レ為二肝要一事。

一、田畑不レ荒様堤防溝門道橋等修覆に怠るべからず、自然水損等にて及二大破一、下におい而普請難レ調程の事は速に可二申上一、荒場起返し之儀も村中申合精々可二心遣一、百性之力に不レ及事者、是以速に可二申出一事。

一、田畑用水之筋、山林等境界を正し、争論不レ起様兼而可二心付一事。

一、御用人馬者不レ及レ申、往来之者人馬継立昼夜に不レ限無レ滞様兼而其仕法立すべき事。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c